白山ふるさと文学賞

第十三回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

中高校生　作文の部　優秀賞

「生きるということ」

美川中学校三年　阿部羅（あべら）　心々奈（ここな）

初めに私は皆さんに問いたい。あなたにとって人生とはどんなものですか？私が人生、そして命について考えるきっかけになったのは５才のときのある出来事です。

熱いグラタンを頬張る冬の日でした。

「おなかに赤ちゃんができたのよ。」

にこにこした母がそう報告してくれました。私たち家族４人にとってそれはたまらなくうれしい出来事で、その日から私達はぬいぐるみで赤ちゃんを抱っこする練習をしてみたり、赤ちゃんの名前を考えたりしました。毎日が希望と期待でいっぱいで、我が家に光が差したようでした。

しかし、そんな毎日は続きませんでした。突然、私が赤ちゃんの話をすると両親は苦笑いをして話題を変えるようになったのです。また、ご飯のあとお母さんは部屋にこもって何かを考えこむようになりました。トイレで静かに泣いている姿も見たことがあります。赤ちゃんに何かあったのかな、どうしたんだろう。聞きたかったけど、聞いたらお父さんとお母さんが困ると思ってなかなか聞けませんでした。

それから一週間くらい経ったとき、この問いの答えを知ることになりました。母は私の手を握り眉を下げて泣きそうな顔をして、

「赤ちゃん、生まれてこなくなったの。ごめんね。」

と言いました。私は頭が真っ白になりました。生まれてこないという言葉が私の中で膨張していき、心が押しつぶされそうでした。その夜から、お父さんもお母さんも笑うことが少なくなり、夜になると泣いていました。まるで私たち家族の命も取られたようでした。それから一か月くらいの間、朝に「おはよう」と言う父と母の眼は腫れたままでした。

そこから時が経ち、現在。私の家族は毎日楽しく暮らしています。私はこの作文をかくにあたって、家族の話をたくさん聞いて、自分のなかでよく考えました。赤ちゃんについてや、命について。そして将来について。そうして話しているうちに、私は母に疑問を抱きました。母はどんな気持ちで今生きているのだろう。泣いていたあのとき、小さく丸かった母の背は、今では仕事も家事も頑張るかっこいい背になっています。そうなるまでに何を乗りこえてきたのだろう。それを母に問うと、

「赤ちゃんの分もあなたたちのことを大切にすると決めたから。あなたたちは自分の人生を精いっぱい生きてね。」

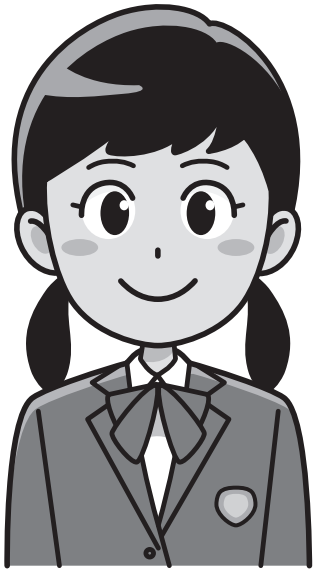
と答えてくれました。この素敵な言葉は、私のなかに優しく響きました。私は、未来に向かって赤ちゃんの分も頑張っていこう、という風に思いました。

私はこの経験やこの母の言葉を通して、気がついたことが２つあります。

一つは、自分の人生は自分だけのものではないということです。人生には、持ち主の過去や未来だけでなく、他人の思いも入っていると思いました。それゆえに、赤ちゃんの命が失われると自分の命まで失われるようになったり、失われた赤ちゃんの命は、私達家族の心の中にあり続けるのです。だから、今持っている貴重な命を大切にして、精いっぱい生きようと思いました。また、赤ちゃんの分も色々なことにチャレンジして、人生を目いっぱい楽しみたいと思いました。

次に、当たり前の毎日は当たり前ではないということです。食べることや笑うこと、話すこと、聞くこと、全部赤ちゃんが送ることのできなかった尊い日々だと知りました。だから、今までは「これしたくないな」、「めんどうくさいからやめよう」と思い、難しいことや時間のかかることを諦めたりしていたけど、これからは毎日出会うすべてのことに感謝して、すべてのことに全力で取り組んでいきたいです。

これからも、私はたくさんのことに迷い、立ち止まり、逃げたくなるときがあると思います。受験勉強や部活、人間関係において、「もうやめたい」「もうむりだ」今までもたくさん思ってきました。しかし、

この経験を通して知ることができた大切なこと。そして赤ちゃんの存在はこれからの人生で辛いことに立ち向かう勇気をくれます。辛いときもこのことを思い出して、逃げずに立ち向かいたいです。

また、私にたくさんのことを教えてくれた赤ちゃんの自慢のお姉ちゃんであれるように、「今」そして「これから」をかみしめて、全身全霊で生きたいです。これが私にとっての人生であり、決意です。改めて皆さんに問います。皆さんにとって「人生」とは、どんなものですか？